

「フルート」外伝第十五話

おとぎ話

1

「貴殿が勇者なのか？……本当に？」

ユラサイの王宮の訓練場で、立派な防具姿の大男がとまどって立っていた。彼の前には、金の鎧よろい兜かぶとを着て二本の剣を背負った少年が立っています。とても小柄なので、大男の彼と並ぶと、年端としはもいかない子どものようです。

すると、彼らを囲むように立つ兵士の中から、皇帝が声をかけてきました。

「彼はまことに金の石の勇者だ。見た目に惑わされると敗れるぞ、ソウケン」

皇帝と言っても、こちらも少年です。長身に青い服を着て、興味深そうに二人を眺めています。

はあ、とソウケンは答えましたが、やっぱりとまどいは隠せませんでした。こうして向き合っている間、金の石の勇者からは闘争心や覇気はきのようなものがまったく感じられないのです。兜からのぞいている顔も、まるで少女のような優しさでした。

すると、勇者の少年が言いました。

「竜子帝が待ちかねているから始めましょう。ぼくのほうは魔法の武器は使いません。普通のロングソードでお相手しますから、安心して好きな武器を使ってください」

その余裕の口調に、ソウケンは、むっとしました。

「好きな武器を？ では、わしのほうでは魔法の武器を使っても良いのか？」

「剣を損ねるような魔法ですか？」

と少年が聞き返します。

「いや。だが、貴殿自身が損なわれるかもしれないぞ」

ソウケンは意地悪く言いましたが、少年はあっさりうなずきました。「けっこうです。行きましょう」

ソウケンは見物人と一緒に並ぶ部下から、愛用の武器を受け取りました。長剣ですが、鞘から抜くと、大きな波状になった刀身が現れます。竜子帝の隣にいた別の少年が、驚いたように尋ねました。

「なんだ、あの剣は？ あんなので戦えるのかよ？」

背は低いのですが、がっしり体格をしていて、青い胸当てと弓矢を身につけています。ゼンです。

「蛇剣というものだ。敵を切ったときの傷口が大きく深くなるように、刃が波状になっているのだ。しかも、あれは魔法の力を持っている。ソウケンの一番得意としている武器だ」

と竜子帝が答えます。

はあん、とゼンは言いました。そんな話を聞いても焦る様子はありません。竜子帝と同じように腕組みして勝負を眺めます。

フルートは背中から剣を抜きました。銀に輝くロングソードです。左手には丸い盾たてを構えています。対するソウケンは蛇剣を構えるだけで、盾は持ってません。刀身が長いので、盾を持つと邪魔になるのです。

「行きますよ」

とフルートが言ったので、ソウケンは答えました。「どこからでも」

とたんにフルートはもうソウケンの目の前にいました。剣を鋭く突き出してきます。

おっ、とソウケンは驚き、とっさに自分の剣で受け止めました。するとフルートは飛びのき、今度は駆け抜けざまに切り込んできました。ソウケンがまた受け止めると、刃と刃がぶつかり合って火花を散らします。

ソウケンは仰天しました。この少年は非常に素早く動きます。しかも、小柄な体からは想像もつかないほど強力な攻撃を繰り返してきます。攻撃を受け止めたソウケンの手がしびれていました。

駆け抜けたフルートが振り返りました。次の瞬間にはまたソウケンの間合いに飛び込んで来て、低い位置から剣を振り上げます。ソウケンは反射的に飛びのきました。兜から下がる頬おおいが切れ、鉄鉾を打ちつけた革の切れ端が音を立てて地面に落ちます。

ソウケンの顔つきが変わりました。ぐっと剣を握り直すと、戦場で敵を前にしているように、全身から気迫を立ち上らせました。

それを見てフルートも表情を変えました。優しかった顔が厳しくなり、青い瞳が強く輝き出します。もう少女のように見えません。

今度はソウケンのほうが先に動きました。駆け寄り、フルートの頭上へ剣を振り下ろします。フルートは左腕を上げました。丸い盾で剣を受け止めて跳ね返し、右手の剣を突き出そうとします。

すると、いきなりソウケンの剣が変化しました。波状の長い刃がぐにやりと曲がり、まるで生きた蛇のようにフルートに絡みついていきます。フルートは驚きました。あつという間に金属の刀身に上半身を縛られてしまいます。

ゼンも驚きました。
「おい、なんだよ、ありや。あれが魔法なのか？」

「そうだ。あれは刀身が蛇に変わって敵を捕らえる、本物の蛇剣なのだ。無理に抜け出そうとすれば剣に体を切られる。さすがのフルートも脱出できないだろう」

と竜子帝が答えました。面白がっている声です。

ゼンは肩をすくめました。

「ぬかせ。フルートがああ程度で降参するかよ。あれでもあいつは金の石の勇者だぞ。よく見てろ」

ソウケンは蛇剣でフルートを捕らえたまま、腰からもう一本の剣を抜きました。刀身の短い小太刀です。蛇剣がすると縮まってフルートが引き寄せられてくると、その脇腹目がけて切りつけます。

すると、小太刀がぼきりと折れました。鎧の隙間の守るものがない部分を狙ったはずなのに、まるでそこも堅い鎧におおわれているように、刃が根元から折れてしまったのです。

驚くソウケンへ、蛇剣に縛られていなかったフルートの足が飛びました。回し蹴りをまとも食らって、ソウケンが吹き飛びます。その間にフルートは蛇剣を払い落としました。金の鎧は鋭い刃にも傷ひとつついていません。

「丈夫な鎧だな。ソウケンの蛇剣は鋼さえ切り裂くのだぞ」

と竜子帝が感心したので、ゼンは得意そうに答えました。

「あつたりまあだ。ノームの名工のピランじいちゃんが作った防具だぞ。たぶん、世界で一番強力な鎧だ」

「だが、守るだけでは勝てないだろう。ソウケンもやられっぱなしでいるような男ではない」

と竜子帝は自分の家臣の肩を持ちます。

ソウケンが地面から跳ね起きました。切りかかってきたフルートをかわして、肩からぶつかっていきます。体当たりを食らって、今度は

フルートが吹き飛びました。地面に思いきりたたきつけられて、ガシャンと派手な音を立てます。

ソウケン は地面に落ちていた蛇剣へ手を向けました。

「来い！」

とたんに剣がひとりで宙を飛んで、主の手の中に戻ります。ソウケンはそれを握り、まだ起き上がれずにいるフルートへ振り上げました。気合いを込めて振り下ろそうとします。

見物していた人々は思わず息を呑みました。そこまで！ と童子帝が試合の終了を告げようとします。

すると、フルートが動きました。倒れたままソウケンへ足払いをかけます。

ソウケンはふいを突かれて体勢を崩しました。大きくのけぞったところへ、フルートが跳ね起きてきます。あれほど強くたたきつけられたのに、少しもダメージを食らっていません。剣の一撃で蛇剣をたたき落とし、返す刀をソウケンへ突き上げます。

「こ、降参！」

とソウケンは両手を上げて叫びました。その咽元には、フルートの剣の切っ先がびたりと突きつけられています。

見物していた兵士たちは皆、仰天しました。童子帝も目を疑いながら言います。

「まことか……？ ソウケンは朕の軍隊で最も強い男だぞ？ しかも蛇剣を使っていたのに！」

「だから言っただろうが。あれでもあいつは金の石の勇者なんだよ。世界を闇から守るヤツが弱くてどうする」

とゼンは答えると、親友へ声をかけました。

「よう、お疲れ。ちよっと手こずったな」

フルートは剣を引いて収めると、兜を脱ぎました。汗まみれの顔に風を当てながら苦笑して見せます。

「難しかったよ。この人はすごく強いから、少しでも気を抜くとやられそうになるんだ。こっちも本気になるしかないから、手加減が大変だったよ」

あれで手加減していたのか！？ と一同がまた驚くと、フルートは続けました。

「金の石はまだ眠っているから、童子帝の大事な家来を傷つけたくなかったんだ。童子帝、これで気がすんだらどう？ あとはもう、ぼくたちに家来と腕試ししてみせる、なんて言わないでくれよ。ゼンと対戦させたりしたら、それこそ死人がでるかもしれないんだから」

「おう。俺には寸止めなんて芸当はできねえからな。命の保証はできねえぞ」

とゼンが笑います。それが嘘でも誇張でもないことを感じて、童子帝たちがぞっとします。

すると、フルートたちの耳に急に少女の声が聞こえてきました。

「フルート、ゼン、もういい？ こっちにきてほしいの……」

ポポロでした。訓練場はその姿はありません。別の場所から魔法使いの声で話しかけてきたのです。

フルートは宙に向かって答えました。

「いいよ。どこに行けばいい？」

「書院よ」

とポポロが答えます。

書院？ とフルートとゼンは顔を見合わせました。

書院と呼ばれる建物は、広大な王宮の一角に建っていました。大量の書物を保存したり、複製や修復をしたりするための場所です。フルートとゼンと竜子帝が足を踏み入れると、紙とにがわの匂いが、ぷんと鼻をつきます。

書院の入口の広間ではメールがいらいらしながら待っていました。フルートを見ると飛びついて、ぐいぐい奥へ引っぱっていきます。

「早く！ 早くおいでよ！ すこいことがわかってきてるんだからさー！」

「す すこいことって？」

フルートは面食らって尋ねました。その後を追いかけながらゼンも尋ねます。

「おまえら、ここで何をしてたんだよ？ ポチやルルもいるのか？」

「リンメイもいるよ。ポチがユラサイの歴史をもっと詳しく知りたいって言い出してさ、リンメイに頼んでここに連れてきてもらったんだ」

「リンメイが？」

と竜子帝も驚きます。

その一同は書院の奥の部屋にいました。巻物を何本も広げた大きな机に向かってポポロとリンメイが座り、ルルも別の椅子の上に腰を下ろしています。ポチは机に上がり込んで、巻物を眺めています。

同じ部屋にはもう一人、フルートたちの知らない人物がいました。

緑の衣を着た年配の男性です。長いあごひげをしているので、フルートたちへ頭を下げると、ひげの先が床につきそつになります。

「そなたは学者の」

と竜子帝が言うと、男性はまた深々と頭を下げました。

「歴史学者のコウでございます、帝。リンメイ様のご命令で勇者の皆様方にユウライ砦のお聞かせしております」

ユウライ砦？ と少年たちがまた聞き返します。

すると、ポチが言いました。

「ワン、そこが光と闇の戦いの戦場になった場所なんですよ。歴史書にはあまり詳しく書かれてなかったから、学者さんに聞けばもつとわかるんじゃないかと思って、リンメイに頼んだんです」

「そういえば、占神もそんな話をしていたね。二千年前に、西から攻めてきた闇の軍勢をユウライ砦で防いだって。ユウライ砦は、ぼくらのことばで言えばユリスナイ砦になる、とも教えられたよ」とフルートが答えます。

歴史学者のコウがうなずき返しました。

「左様、それはユラサイの二千年の歴史の中でも、昔から学者たちの大きな関心を集めてきた部分です。この国の開闢となる戦いであり、しかも異国の神の名にちなんだ国名になったにも関わらず、かの戦いに関する記述は非常に少ない。この時にどのような出来事があったのか、どのようにしてこの国は始まったのか、その謎を解き明かすために我々歴史学者は研究組織を作り、幾星霜にわたって研鑽を重ねて

「ちよつと待て、おっさん！」

とゼンがいきなり話をさえぎりました。おっさん呼ばわりされた学者が、目を白黒させて絶句します。

「話が難しすぎらあ。こちとらフルートやポチみたいに頭は良くねえんだからな。簡単に話せ、簡単に」

「朕も同感だ。学者たちの話は難しすぎてついていけない」

と竜子帝も賛同すると、リンメイがあきれたように言いました。

「ほんとにしようがないわね、キョンは。皇帝なんだから、もうちょっと国の歴史に興味を持ちなさいよ。」
婚約者から叱られて、竜子帝が慄然とします。

「ワン、つまり、こういうことだと思っんです」

とポチが机の上に乗ったまま、また話し出しました。

「二千年前、このユラサイまで攻めてきた闇の軍勢は、光の軍勢とユラサイの連合軍に敗れた。闇の軍勢の総大将だったデビルドラゴンは、自分を倒した方法が記録に残っていると、次に世界に復活してきたときに、またやられると思って、歴史の記録の中から、光と闇の戦いに関することを消してしまったんじゃないかな、って」

「戦いに関することを消した？ どうやって？ デビルドラゴンはもう倒されていたのだから？」

と竜子帝が聞き返したので、フルートが答えました。

「デビルドラゴンを殺すことはできないよ。だから、光の軍勢は奴を捕まえて、世界の最果てに幽閉したんだ。あいつはそこから力を伸ばして、魔法で戦いの記録を消したんだよ……。記録はどこにも何も残っていないんですか？ まったく？」

とフルートに尋ねられて、歴史学者が答えました。

「史書には、ユウライ砦の攻防とユラサイの国名の由来が載っていますが、それ以外の書物にはまったくありません。いや、本当は、かつてユウライ戦記という書物が書かれたことはあるようなのです。ユウライ砦の攻防戦を書きとめたものなのですが、そういう書が作られたという記述があるだけで、原本はどこにも残っておりません」

「消されたんだと思うわ。デビルドラゴンに……。特定のことばか文章があると発動するような魔法を、この世界にかけたのよ」

とポポロが言います。

ふうむ、と竜子帝はうなりました。

「では、どうしようもないではないか。二千年も昔の戦いだ。記録が残っていないければ、我々がそれを知る手段はないぞ」

「いいえ、帝。それを知るために、我々は長年研究を続けたのでございます」

と学者が答えました。

「真実を知りたいと熱望する気持ちは、不可能を可能にしていくものです。我々歴史学者は、失われた戦いの記録を探し求め続けました。自分の足で国中をくまなく歩き回り、各地から戦いに関すると思われるものを持ち帰って検討を重ねたのです。研究は先達から後輩へ引き継がれて何百年にもわたり、今もなお続いております。この研究にたずさわった歴史学者の人数は、もはや数えることができません」

フルートたちは、思わずことばを失いました。気が遠くなるような時間と情熱をかけて真実を追い求める学者たちの姿に、圧倒されてしまったのです。

竜子帝が感心して言いました。

「そなたたちは実に立派だ。このようにすばらしい学者たちのいる国を、朕は誇りに思うぞ」

すると、学者は深く頭を下げました。

「身に余るおことばです、帝……。我々がこうして続けてこられたのも、ひとえに、歴代の皇帝陛下がご支援くださったおかげです。我々は、この書院を中心に研究を続けてまいりました」

竜子帝はうなずきました。

「では、朕もそなたたちを応援しよう。この書院で研究をさらに深め、いつの日か必ず、失われたユラサイの歴史を復元するように」

わがままで本質はとも素直な竜子帝です。当然のことのようにそつ命じたので、センが、へっ、と笑い、歴史学者は感激してさらに深々と礼をしました。

「実にありがたいご命令でございます……。我々の研究はまだ完成しておりませんが、それでも、長い間に少しずつ明らかになってきたことがあります。それを帝や勇者の皆様へお知らせすることができるとも、幸せなことと思っております」

「では、何かわかったことがあるんですね!？」

とフルートが身を乗り出しました。デビルドラゴンを倒す手がかりになるかもしれないと思うと、自然と声が踊ります。

「あたいたち、さつきからその話を聞かせてもらっていたんだよ」

「デビルドラゴンの魔法を逃れて残った記録があるんですって」

とメールとルルが口々に言ったので、それは？ と少年たちがさらに身を乗り出します。

歴史学者は話し続けました。

「失われた戦いの記録は、書の中には残っておりませんでした。ですが、人が歴史を伝える手段は、なにも書物だけとは限りません。我々是人から人へ口伝くつたえしていくものの中に史実が現存するのではないかと考え、事実、いくつか発見することができたのです。それは、おとぎ話になって語り継がれておりました」

意外なことを聞かされて、フルートたちは目を丸くしてしまいました。

3

おとぎ話？ と驚いた竜子帝やフルートやゼンに、歴史学者のコウ

が話し始めました。

『コウモリ』という題名でよく知られている物語でございます。一般には、このように語られます。昔、国中の鳥と獣がささいなことから対立して戦争を始めた。鳥の陣営が優勢の間、コウモリは『私は羽を持つから鳥の味方だ』と言っていたが、やがて獣の陣営が優勢になると、『私は毛の生えた体を持つから獣の仲間だ』と寝返った。やがて戦いは鳥と獣の引き分けで終結したが、どちらの陣営にも良い顔を見せたコウモリは、どちらからも信用されなくなり、以来、夜の中をこっそり飛び回るようになった。いつものです」

「その話ならば、朕も知っている。子どもの時分にリンメイの母からよく聞かされた。コウモリのように八方美人にならずに、自分の立場をきちんと定めよ、という教訓きょうくん話だ」

と竜子帝が言いました。その話のどこが過去の史実なのだ、と考えているのが、はっきりとわかります。

すると、学者は静かに続けました。

「これは形を変えられた物語でございます。帝。本来の筋は違っておりました。そもそもは、このような物語だったので。昔々、コウモリが世界中の獣を相手に戦いを起こした。その時、コウモリは竜を味方に引き入れようとしてこう言った。『おまえは我々と同じように空を飛ぶのだから、我々の仲間だ。我々の陣に加われ』すると、竜が答えて言った。『我ら竜は日の光の中を飛ぶもの。夜の闇を飛ぶコウモリの仲間にはなれない』竜は獣の陣営に加わってコウモリと激しく戦い、その宝を奪って隠してしまった。そのため、コウモリは敗れ、小さな姿になって、他の生き物の目につかないように夜の中を飛び回るようになった……」

「かなり違つな。戦ったのはコウモリと獣なのか。しかも、間に立つのが竜とは」

と驚く竜子帝の隣で、フルートが考える顔になりました。

「世界中を相手に戦いを起こしたコウモリ……光と闇ってことばも出てきている。しかも、元々コウモリはかなり大きかったような感じだ。なんだか似てるぞ、ゼン」

「ああ。そういや、あいつの翼はコウモリそっくりだもんな」

とゼンも真剣な顔でうなずきます。

ワン、とポチが口を開きました。

「北の大地の戦いの時、ロキや占いおばが最初の光と闇の戦いのことを話してくれたけれど、あれもトジー族のおとぎ話みたいになって伝わっていたじゃないですか。光と闇の戦いは、書物に書き記すと、デビルドラゴンの魔法で消されてしまっけれど、こういう形なら伝えることができたんですよ。このおとぎ話のコウモリは、きつとデビルドラゴンのことだと思えます。獣と言われているのは、きつと光の戦士たちのことです」

「じゃあ、竜ってのはなんだ？ デビルドラゴンだって竜だよな」

とゼンが言うと、竜子帝が即座に答えました。

「このユラサイのことだ。この国はしばしば竜に例えられるのだ」

「左様でございます、帝。ここにこのような絵巻もございます」

と歴史学者が机の上の巻物を広げて見せました。色鮮やかな緑の竜が、虎や鹿、馬、鳥などと一緒に、黒いコウモリと向き合う絵が描かれています。

リンメイが竜子帝に言いました。

「緑の竜とくれば、なおさら、このユラサイの象徴よ、キョン。これは間違いなく失われた記録なのよ」

なるほど、と竜子帝やフルートたちは絵巻を眺めました。そこに描かれているコウモリは、竜と匹敵するくらい巨大な姿をしています。

学者が話し続けました。

「二千年前、闇が西から攻めてきたとき、ユラサイは光と闇のどちらでもない中立的な立場にあったのだと思われます。その時コウモリは

「デビルドラゴンだよ」

とメールが訂正します。

「ああ、はい。そのデビルドラゴンは、時の王であった琥珀帝こはくていに協力を迫ったのですが、琥珀帝はそれを断って対立し、後からやって来た光の軍勢と手を結んだのです。ユラサイは闇に対して非常に大きな戦闘力を発揮したようです」

「ワン、ユラサイは光と闇とも違う魔法が使える国ですからね。ポポロの光の魔法で術が防ぎきれなかったみたいに、闇の魔法を使う連中にも手強かったんだと思えますよ」

とポチが言います。

フルートはいっそう考え込みました。

「そうか、それでユラサイは、デビルドラゴンと再び戦うときまで、神竜によって守られることになったんだ……。だけど、おとぎ話の中で言っている、コウモリの宝っていうのはなんだろう？ それを竜が奪ったから、コウモリは負けたんだらう？ つまり、ユラサイが宝を奪ったから、デビルドラゴンは負けたってことだ。デビルドラゴンの宝っていうのは、いったい……？」

「残念ながら、そこまでは物語でも触れてはおりません」

と学者が言いました。

「このおとぎ話自体が、ごく限られた場所にしか残っていないのです。その場所には、決まって神竜の社殿しやけんがあります。デビルドラゴンの術によっておとぎ話が変形させられるのを、神竜の加護かごが防いでいたのだと思われます」

ふう、と一同は溜息をつきました。二千年前の戦いが少しずつ見え

てきた気がするのですが、肝心の部分はまだ深い霧の中です。

すると、竜子帝が言いました。

「逆に、神竜の加護を受けている場所になら手がかりは残っているとも言えるではないか。大社殿や王宮は特に神竜の加護が厚い。おまえたち学者もすでに調べているだろうが、改めて手がかりを探してみようだ」

歴史学者はすぐに頭を下げました。

「は、そうさせていただければ……。なにぶん恐れ多い身分の方たちばかりなので、一介の学者である我々には、話を聞かせていただくことがなかなか難しゅうございます」

「よし、朕が命令して、王宮と社殿の人間全員に協力させてやる」
すると、リンメイも言いました。

「ねえ、キヨン、竜仙郷にも行ってみるといいんじゃないかしら？」

あそこも神竜の加護が厚い場所よ。しかも占神がいるわ。私が竜仙郷まで飛んでもいいわよ」

さっそく打ち合わせを始めた三人に、勇者の少女少女たちは思わず笑顔になりました。手がかりはまだつかめなくても、そのために動いてくれる人々がいることを心強く感じます。

ポチは机の上に乗ったまま、おとぎ話の巻物をのぞき込んでいました。コウモリと竜と獣たちの絵をつくづく見ながら言います。

「ワン、こんなに長い巻物なのに、絵はこれひとつしかないんですね。続きの場面が描いてあればいいのに」

「そうだね。そうすれば、コウモリの宝が何なのかわかったかもしれないんだけど」

と言いながら、フルートも改めて絵巻を眺めました。絵の先は白紙になっていましたが、念のため続きの部分も見てみようと、巻物を先

へ広げます。

その時、フルートの胸で魔石がきらりと光りました。フルートはペンダントを鎧の外に出していたのです。灰色の石ころのようだった石が、みるみる色と輝きを取り戻して金色に変わります。

「フルート！」

とポポロが声を上げた瞬間、魔石が光を放ちました。金の光で巻物を照らします。

とたんにフルートやポチも息を呑みました。それまで何も書いていなかった巻物の空白に、黒々とした文字が浮かび上がってきたからです。何行にも渡って書き連ねられています。

「文章だ！」

とフルートは叫ぶと、あわてて巻物を広げました。

4

フルートが広げる巻物を、金の石は照らし続けていました。

何も書かれていなかった白紙の部分に金の光が当たると、まるであぶり出しのように、次々と文章が現れてきます。筆で書かれた黒い文字です。

飛びつくようにそれをのぞき込んだゼンたちが声を上げました。

「全然読めねえぞ！」

「ユラサイ文字だよ！」

「竜子帝！ リンメイ！」

とフルートがユラサイ人の友人たちを呼びます。

とたんに、キャン！ とポチが飛び上がりました。巻物がいきなり火を吹いたのです。端のほうからめらめらと燃え出します。

ルルが叫びました。

「闇の魔法よ！ ポポ口、消して！」

「口エキ！」

ポポ口が巻物に手を突きつけて呪文を唱えます。

ところが火は消えませんでした。ますます大きくなって、巻物全体に燃え広がっていきます。フルートがあわてて炎を手でたたきました。やはり消えませんが、

駆けつけてきた竜子帝たちが驚きの声を上げました。

「それは！？」

燃える巻物の中で絵が変わっていました。獣の群れは鎧兜をつけた戦士やたくさんの生き物に、緑の竜は白い竜と青い服を着た男性に、コウモリは大きな黒いドラゴンになっていきます。ドラゴンの背に四枚の翼が現れます。

「神竜と琥珀帝が描かれている！　これがユウライ戦記だ！！

早く火を消してくれ！！」

と歴史学者が悲鳴のように叫びましたが、燃え広がっていく炎を止めることはできませんでした。机から床の上へ落ちて伸びた巻物が、みるみる火に包まれ、黒い燃えがらになっていきます。

「だめだ。もう読めぬ……」

と竜子帝が茫然とて言いました。巻物は燃え尽きた後、燃えがらまで崩れて、跡形もなく消えてしまったのです。不思議なことに、巻物が載っていた机や床に焼け焦げた痕はありませんでした。重なるように広がってあった他の巻物にも、火は燃え移っていません。

「魔法の火だったのよ。この世から光と闇の戦いの記録を消すための

……。デビルドラゴンの魔法だわ……」

とポポ口が震えながら言って、大粒の涙をこぼします。

「なんということ！　なんということだ　！！」

歴史学者は大声を上げて座り込みました。彼らが追い求めていた歴史の真実が、目の前に現れて燃え尽きていったのです。あまり突然のことだったので、それを読む暇さえありませんでした。

どん！ とフルートは拳を机にたたきつけました。そこに戦いの絵巻物はもうありません。

すると、机から飛び下りていたポチが、床を見つめながら話し出しました。

「金の石の勇者が世界から失われた後、我らは光の名の下に再び集結し、闇の竜と対決した。かの竜が己の宝に力を分け与えたので、我らはそれを奪い、竜の王が暗き大地の奥へと封印した。宝を取り戻さんとしたかの竜は捕らえられ、世界の最果てに幽閉された。これは、全世界と我らの存在を賭けた、闇の竜との戦いの顛末である……」

一同は仰天しました。ポチは、まるでそこに書物があるように、すらすらとそれだけのことを語ったのです。

「ポチ、それは……？」

とフルートが尋ねると、小犬は顔を上げて言いました。

「ワン、今の巻物の前書きです。燃えてしまう前に、なんとかここまでは読めました」

「前書きだと！？」

「ポチ、あんた、ユラサイ文字が読めたのかい！？」

仲間たちがまた驚く中、リンメイが言いました。

「私が教えたのよ。ポチがキヨンになっていた間に

フルートは思わず自分の両肩を抱きました。全身に総毛立つような戦慄が走ったからです。気がつかないうちに、ことばが口をついて出

ます。

「手がかりだ……デビルドラゴンを倒すための……。とうとう見つかった……」

「金の石の勇者が巻物を開いたときに文面が現れる魔法がかけられていたのね。だけど」

とルルが言つて、困惑したように口ごもりました。戦記の前書きはあまりにも簡略で、具体的にどんなことを意味しているのか、よくわかりません。

すると、フルートは言いました。

「デビルドラゴンが去つていくときに、言い残していったことがあるんだ。間もなく我は力を手に入れる。約束の時が来れば、世界は我がものになる、つて。デビルドラゴンは宝に自分の力を分け与えていた、と戦記は言ってる。その宝が、奴を倒すための鍵なんだ！」

興奮して、自然と声が大きくなります。

「でもよお、デビルドラゴンの宝ってなんだ？」

「光の軍勢は宝をどこにやったつてわけ？」

ゼンとメールが口々に言つので、ポチが答えました。

「暗き大地の奥ですよ。竜の王、つまり、神竜がそこに宝を封印したんだ」

暗き大地の奥……と一同は繰り返して、顔を見合わせました。竜子帝が全員の想いを代表して言います。

「それはいったいどこのことだ？」

書院の奥の間は沈黙になりました。誰もが考え込んでしまっています。やがて、また口を開いたのはポチでした。

「暗い大地の奥……暗いのは闇……大地の奥は地底……闇の地底……地底にある闇……」

連想するようにことばを連ねていきます。

とたんに、フルートたちは、はっとしました。ひとつの場所に思い当たったのです。少女たちがとまどい、ゼンが洗い顔で頭をかきむしります。

「つたく。行かなくちゃならねえのか？ マジかよ？」

「行くさ。そこに奴を倒す方法があるなら、どこへだってぼくらは行く」

とフルートがきつぱりと答えます。

竜子帝やリンメイや歴史学者は意味がわからなくなって、目を丸くしました。

「そなたたちはどここのことを言っているのだ？」

と竜子帝に聞かれて、フルートは答えました。

「地底にある闇の世界のことさ。闇の国だよ」

口調は穏やかでも、ことばは重く響きます。

勇者の少年少女と犬たちは、互いの目を見交わすと、静かにうなずき合いました。闇の民が住み、闇の怪物がひしめく闇の国。次はそこへ行くと決めたのです。

書院の外で、名もわからない鳥が、予兆のようにキーンと鋭い鳴き声を上げていました。

(2010年3月5日)